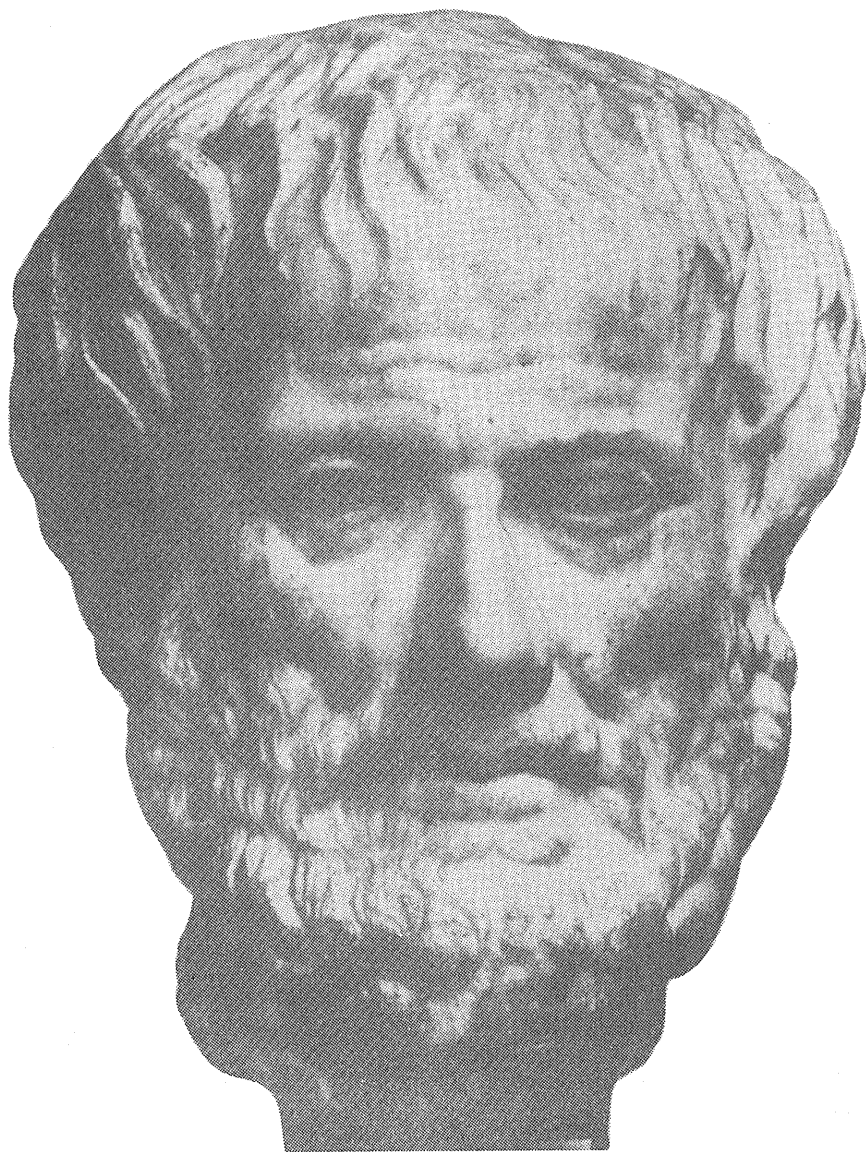


北里大学教養図書館

閱 覧 ニ ュ ー ス

60 号

1990. 4



ARISTOTELES

「ナイーブ」連想

手塚 甫

「ナイーブ」という言葉を広辞苑で見ると「素朴なさま、純真なさま、うぶ」とある。が、この言葉はもともとラテン語のnativus（生れながらの）から来たもので、今日、ヨーロッパ各語の中でも同じような意味で用いられているようである。例えば英語で“You are so naive!”と使うこともよくあるらしい。尤これはあまりいい意味ではないようで、日本語でも「あなた単純ね」と言われて、喜ぶ人はいまい。しかし生の逞しさを感じさせる言葉ではある。が、言葉の詮索をここでするつもりはない。本来の意味から外れることになるかも知れないが、実は最近僕はこの言葉を聞くとS君を連想するのである。

S君に最初に会ったのは昨年4月、わがゼミの昨年度最初の集りの時であった。色白で、背はすらっと、身なりも清潔できちんとしているのだが、一見して東京近辺の人ではないと思わせるものがあつた。とつとつと、しかしきちんとした言葉遣いで語る自己紹介に、すでに生真面目な人柄が滲み出ていたが、東北地方を想わせる温みのある抑揚がその印象を強めた。昨今の「全国一律」の、単調で平板なしゃべり方とは違って、それは非常に新鮮に響いた。これは掘りたての馬鈴薯だ、とS君には大変失礼な言い方だが、正直そう思った。そう、ナイーブさを感じたのである。この最初に受けた印象はそのまま今も変わらない。が、これは彼がこの1年間全く変わらなかったということではない。彼は大いに変わった、がそれにも拘らず彼は依然として彼なのである。

我々のゼミでは、前期は各自が分担を決めて一冊の本を順次にまとめ、発表して行くというやり方をとったが、S君の最初の発表は、率直に言って惨憺たるものであつた。こう言ってもS君に決して不名誉にならないと、今僕は思っている。彼は担当分を彼なりに丹念にノートして来てはいた。が彼は何の飾りもなく、飾ろうともせず、ポイントが何かをも示さず、ただ自分のノートを読み上げたのであつた。聞き手の存在など眼中にない。発表後、参加者全員からそれらの点が指摘された。S君は指摘された一つ一つに深く頷きながら黙って聞いていた。が、それによって落ちこむ様子は毛ほども見せなかった。これがS君のわがゼミにおけるデビューであつた。

それから1ヶ月程経って、またS君に発表の番が来た。彼が前回の経験をどのように生かしてくれるか僕も少なからぬ関心をもっていたのだが、今回の発表は面目を全く一新していた。本の内容が彼の中で十分に消化されていて、だから聞く方も要点がよく理解出来たし、S君も聞き手のことを考え、話のテンポも工夫していた。こうしてみると、最初の失敗は彼が発表の何たるかを知らなかったからだけのことだと分る。それはとにかく、皆の批判をこれほどまでに真直ぐ受けとめ、まともに答えてみせたS君に、僕は目を見張る思いがした。尤皆の批判も決してS君をやっつけようとしたものでなく、むしろ励まそうという気持ちに溢れたものであつたことを言っておかねばならぬ。

夏休みのゼミ合宿は東北にある学部の研修

所を借りて行なった。先輩の話や周囲の景観がすっかり気に入ったS君は、実家が同じ県内にあることもあって「ウチから学校まで歩いてみようかな」と呟いた。同じ県内とは言え百キロ近くはあろうという道のりである。しかしこのS君の呟きを聞いた者は、それを冗談だとは誰もとらなかった。「彼ならきっとやるだろう」と言葉通りに信じられたからである。夏休みの合宿後はその実家にも戻らず、教養部を離れたら東京へ来る機会もなくなるからと、皆と一緒に暑い相模原の下宿に戻ったが、どうも東京や横浜に出向いた形跡はなかった。夏休み中何回か教養図書館を僕が覗いた時に、決まって彼の姿を見たからである。そこで彼は別にガツガツと勉強していた訳ではない。面白そうなビデオを見たり、椅子の上に正座しながら好きな本を読んだりして過ごしていたようだった。冷房の効いた図書館でこんな風に時間を潰す方が、S君にとっては渋谷や横浜を歩き廻ることより楽しかったのかも知れない。

後期にゼミは次の段階に入った。テーマも大きくなり準備期間も多く要し、従って発表も前期よりは容易でなくなって来るはずだった。11月のS君の発表は、夏の図書館での蓄積がものを言ったのかどうかは知らないが参加者の誰もが認めるように、それは立派なものであった。同じ活動段階でなら社会科学を専門にやろうとする学生の中に入れてもそんなに恥しくないほどであった。5月のS君を思い出すにつけ、人はこんなにも変り得るのかと僕は改めて思い知らされた。

授業でのS君は中央の列の一番前、教卓のすぐ前に陣取る。しかし授業中の彼は全く目立たない。が、時々妙なことをする癖がある。いきなり立上り、つかつかと教卓に近づくや「先生、トイレに行つて来ます」と言いざま教室を駆け出て行くのである。余程せっぱつ

まっていたのか「ちょっと待て」と言う間もあらばこそである。ともあれ暫くしてさっぱりした顔をして戻って来る彼を見ると怒るに怒れない。しかもこれは1回で終らなかった。僕の記憶しているだけでも3回はやっている。この点では彼は全く変らなかった。

S君はリュックを背負って歩くことが多いせいか背筋をピンと伸ばしながらも上体を心もち前に傾けるようにして、大腿で弾むようにしながら真直ぐ前を向いてスタスタと歩く。その肘から先を下に向けてやや開き加減に腕をふる。この歩き方も変らない。それはスマートとはちょっといいにくいかも知れないが、僕はいかにもS君らしい歩き方だと思う。この歩き方のままに歩いて行ったら、彼は一体どこまで行くのだろうか。次に会う時、S君がどんなに変わっているのか、いないのか、僕は今から楽しみにしている。

(教養図書館長)

《 ひ と こ と 》

図書館って、何？

どんなところ？

この質問に対して、「快適な空間で、友達とおしゃべりをする所」と答える方がほとんどです。でも、それだけではつまらないと思いませんか。図書館というせっかく与えられた場所を、もっと有効に活用してみたいと思いませんか。図書館でなければ出来ない事を。その為のお手伝いを、私達はしたいと思えます。わからない事、疑問を感じた時には、どしどし尋ねて下さい。

2階のサブ・カウンター上の投書箱も、大いに利用して下さい。又、差込の購入希望票は、随時受け付けていますので、利用して下さい。

「ことばの世界・世界のことば」

西村月満

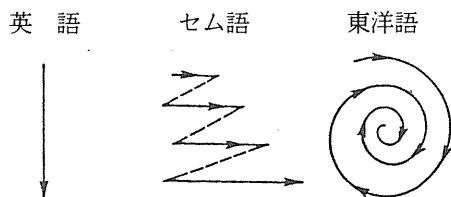
人間が長い時間をかけて発達させてきた道具として、言語は最も精巧なものの一つと言えるでしょう。実際、言葉の獲得は人間の証しですが、ここでは母語以外の言語を学ぶことについて、三つの面から考えてみます。

最初に、アメリカの一つの寓話を紹介しましょう。一匹の猫が壁の穴の奥にねずみがいるのに気づき、少し離れた所で犬語と猫語をたくみに使い分けて犬と猫が喧嘩をしているように見せかけ、「このすきに」と飛び出してきたねずみをつかまえ、勝ち誇らしげに、“How truly my father taught me that if you want to live well, you must become bilingual.”（本当にお父さんが教えてくれた通りだ、いい暮しをするには二言語話せなくちゃ。）と言うのです。アメリカン・ドリームを追いかける多くの移民にとって、標準英語の習得が死活問題であることを象徴する話ですが、現在国際的なコミュニケーション手段としての英語の重要性の高まる日本にもあてはまる話といえるでしょう。アメリカでは、1957年にソビエトが人類最初の人工衛星の打ち上げに成功した際、議会が急拠、自国の安全と防衛のために外国語の研究教育が必須であるとの見解を打ち出したこともありま。外国語の習得はこのように実利的な面が強調されがちですが、それだけにはとどまりません。

ひるがえって言語は基本的にどのような働きをするものなのか考えてみますと、ヴァイ

スゲルバーという学者はそれを星座にたとえ、美しい説明をほどこしました。つまり漆黒の天空に無数に脈絡なく存在する星々を群にまとめ星座を想定すること、人間が知覚力と思考力によって無秩序な世界に秩序を与え創造した精神的な中間世界、それが言語であると考えられるのです。世界に秩序と意味を与えるやり方は、言語共同体の価値観が決定し、従ってその価値基準の違いから必然的に各言語の語彙の意味・文法形式・表現形式の違いが生まれてくると言えます。外国語と母語を比較対照することから、他国と自国の文化や社会について多くのことを学び得ます。

カプランという人はいくつかの異なる言語の文章の展開法の違いを研究し、グラフィックにまとめています。たとえば、



英語が最も明快に直線的に結論へ向けて進むのに対し、「千一夜物語」を思い起こさせる並行にいくつかの話があらわれながら進んでいくセム語（アラビア語など）、遠まきにスタートし時間をかけて核心にせまる東洋語、というパターンがわかります。

英語の直線的な性格というのは、一つのセンテンスをとってみても、主語のあとにくる動詞が要となって、あとにくる語句を直線的に関係づけることにもみてとれます。英語の文は動詞をみればあとの文章構造の枠組が即

座に推測のつく、きわめて見通しのよい言語と言えるでしょう。こうした英語のわかりやすさは、英語が商人の言葉として発達したせいであるという見解もあります。英文和訳よりも、日本語を英語に翻訳する時の方が、この二言語についてはるかに多くの違いを発見することができ、興味深いものです。

さて最後に、言葉のもつ、広い意味での美的体験をひきおこす力、あるいは言葉の呪術性ともいえる力についてふれてみたいと思います。多くの詩人の中で、私はフランス19世紀の詩人、ボードレールが好きなのですが、彼は「パリの憂鬱」所収の“Enivrez-vous”（酔え）という詩において、人間は時間の重荷から逃れるために絶えず酔っていなければならない、何によってと問われれば、酒・美德・あるいは詩によって、と答えています。ボードレールの詩は、その描き出す世界とその言葉の音の力が不可分に結びつき、五感全体をゆるがすような力をもっています。実際フランスでは軽い神経症の患者にボードレールの詩を音読させると治療上の効果があるそうです。詩の他、謎々や呪文、宗教上の祈りの言葉、政治的スローガンなどにも人間を酔わせ、鼓舞する力があります。こうした言葉は翻訳では本質がつかめません。

言葉は、古代の人々が歌いかけることで天地自然と心をかよわせうると信じたように、人間を限りなく実体に近づけてくれることもあれば、逆に実体のない幻想に導くこともあるでしょう。人間をまどわすこともあれば、救うこともあるでしょう。

生まれおち、言葉を獲得し、又言葉のない世界へかえっていく人間。このつかの間の人生を豊かにしてくれる言葉の世界、世界の言葉。

新入生の皆さんが、北里大学での英語や第二外国語の勉強を通し、言葉の広く深い世界へ踏み入って下さることを希望します。

（英語：応用言語学）

〈参考図書〉

『日本人の英語』 マーク・ピーターセン 著
岩波書店 1988（岩波新書 新赤版 18）

『日本語と外国語』 鈴木孝夫 著
岩波書店 1990（岩波新書 新赤版 101）

——図書館利用案内——

図書館に入館したら、持ち物を持ったまままっすぐ階段をあがって下さい。2階部分が、新刊書中心の一般図書を併設した閲覧室になっています。この階には、図書館の蔵書のうち比較的利用の多い自然科学系の図書を含め、最近受け入れた図書（過去5年分にさかのぼって）が全分野にわたって配架されています。階段を上って右側のコーナーには、講義用参考文献・ゼミ指定図書・業績・文庫本・新書・小原文庫があり、南側にはキャレルを配し、北側にはグループ学習が可能な閲覧席があります。この階にない図書は、地階の電動書架で探して下さい。

尚、貸出・返却・予約・複写の手続きは、1階のメインカウンターで受け付けます。



栗 か 栗 か

小 野 健 一

栗一粒秋三界を蔵しけり

寺田寅彦先生の句である。栗一粒は「くりひとつ」と読むのであろう。実体験に基づく感動のこもった実に良い句である。中谷宇吉郎氏の「雪は天上からの手紙である」と並んで、科学者の箴言としても秀抜な、いかにも寺田先生らしい句である。ところが、10月18日の朝日新聞「天声人語」によると、この句は栗ではなくて栗が本当だと言う。栗ならば、栗一粒は「ぞくいちりゅう」と読むのかも知れない。栗か栗か、たかが俳句ひとつの問題だが、他ならぬ寺田先生のお作となると、どちらかはっきりするまでは落着けないのである。

「天声人語」によると、この句の初出は松根東洋城氏の主宰する句誌『澁柿』の昭和6年11月号で、先生の書いていらっしゃる巻頭随筆の末尾にこの句が記されているという。

『澁柿』は手もとに無いから全集で調べる他ないが、その随筆は『寺田寅彦全集』の第6巻に載っている。私の持っている全集は昭和12年頃が一番初めの版で少々古いから、巻数などに最近の版とずれがあるかも知れないが、6巻に「短章その一」として纏められている文章中「曙町より（五）」（142頁）がそれである。

「曙町より（五）」はガラスの割れ目に関する先生の実験の紹介で、水平に置かれたガラス板の上に鋼鉄の球を軽く落とすと、板の表面の球の当たったところを頂点として、ガラスの内部に円錐形の割れ目ができる。毎日毎

日ガラス板を割りながら割れ目を顕微鏡で眺めていると、割れ目の円錐が段々大きなものに思えてくる。今では一寸した小山のように感じられる。山の高さを測ったり、山腹の壁の数をかぞえたりしていると、ますます大きなものに見えてくる。と言うような話で、球の大きさや落とす高さによって山の高さや壁の数が変わるから、いまに割れ目を見ただけで直径何ミリの球が幾らの速さでぶつかって作った割れ目か言いあてられるようになるだろう、と言って、はじめの俳句が出てくる。

余談になるが、厚さを均一に磨き上げた上質のガラス板で当時簡単に手に入るものと言うと、使用済みの写真乾板が最適であった。フィルムの普及する以前は、ガラス板に感光乳剤を塗った乾板が使われていたが、理系の実験室ではどの分野でも写真をふんだんに使うから、使用済みの乾板が殆ど無限に堆積してゆく。それを硝酸で洗うと銀が溶けて透明なガラス板が得られるが、うまいことに片面にゼラチンの薄膜が付いているから、ガラスが割れても破片が飛び散らないで其のまま残っていて呉れる。寺田先生も上記の実験には使用済みの乾板をお使いになったようである。

随筆の最後に出てくる俳句は全集でも栗と印刷されている。栗が初めて顔を出すのは同じ全集の第7巻、東洋城氏の編纂になる先生の句集の中である。同じ全集の中に栗と栗が共存する以上、句集編纂の機会に先生の手稿と照合する手続は踏まれなかったと思って良い。6巻の栗は『澁柿』からそのまま来たものであり、7巻の栗は東洋城氏のミスと考え

て良さそうである。

東洋城氏がミスしたのは、栗のほうが遙かに寺田先生らしいからであろうが、栗のほう^が先生らしいとすると、『澁柿』の栗は誤植ではないか、本当は先生^の原稿は栗だったのではないかと疑って見る価値があるかも知れない。『澁柿』を主宰する東洋城氏は当然先生^の原稿を見ている筈であるから、原稿の栗が彼の無意識のどこかに引っ掛かっていて、それがミス^をを犯させた^とすると話が断然面白くなるのだが、事実はどうだろうか。今とな^{って}は原稿^のの見つかる可能性は殆どないから、随筆の内容から判断する他ないが、それで良ければ、分脈から言って栗よりも栗のほう^が妥当である。栗は『澁柿』の誤植ではなく、先生^の原稿が始めから栗^だったのだと断定して恐らく間違いはない。

これで栗か栗かの問題には一応^{けり}覺がついたが、偶然のミスが飛んでもない名句を生んだところがこの「事件」の面白さかも知れない。栗一粒では栗も秋も単なる比喻にすぎないが、栗一粒の栗や秋は生きている。寺田先生に纏わる虚誕には他に「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉もある。これも本当は先生のお言葉ではなくて、誰かの思い違いから生まれた言葉であることを、大分以前に、科学史家の矢島祐利氏が注意な^さったことがあったが、それ以後も、この言葉はすっかり世の中に定着して、立派に一人歩きしているようである。「栗一粒」も、寺田先生のお作でないことがわかったというだけの理由で破棄されて仕舞うようなことなく、昭和初期の読人しらずの名句として、いつまでも人々に記憶され、存続することを願って止まない。

(元教授・物理学)

図書館利用Q & A 〈貸出〉

Q：本を借りるには、どうしたらいいですか？

A：館外貸出は閲覧証を提出し、貸出票とブックカードに必要事項を記入し、返却日を押してもらって下さい。

図書館内では自由に閲覧できます。但し、利用が終わったら元の場所に必ず戻して下さい。

Q：何日間借りられますか？

A：貸出期間は一週間です。

洋書は二週間です。

但し、新着雑誌は午後4時から翌日の午前11時までの一夜貸しをしています。

また、期限内に読み切れなかった場合は、その本と閲覧証を持参すれば、予約がない限り延長できます。

Q：何冊借りられますか？

A：貸出冊数の制限はありません。

何冊でも御自由に。持てるだけどうぞ。

Q：借りたい本がないんですが。

A：貸出されているかもしれません。

カウンターで確認して下さい。

その場で予約することができます。

□ 表紙解説

津 末 玄 夫

北里大学の多くの学科では国家試験があるので、多くの学生諸君は立派な職業人となるための勉強をする事になる。しかしその前に、特に教養の時期にはもっと基本的な事について考えてもらいたいものである。例えば「人にとって幸福とは何か」とか「自然科学にとって何が可能で何が不可能か」等々である。

表紙は、“万学の祖”アリストテレスの肖像である。その全集は図書館にあるが、繙いてみると広い分野にわたって実に多くの観察、論証が述べられている。例えば「卵を持った鰻は発見された事がない」という記述がある。また人は死んでどうなるかは彼にとって余りにも自明だったので、夢を根據として論証している。夢を重視する点でパスカルや荘子と軌を一にしている点が注目される。皆さんはどんな夢を見ますか。

二千年以上経た今日、初の問題は自然科学の範囲であるとされ、この分野では提示法が客観的であるが故に積み重ねによる進歩が可能である。特に最近二百年に大きな進歩がみられた。今日魚に卵がある事を疑う人はないであろうが、近年実際に鰻の卵を得ようとした人は大きな困難に遭遇した末にこれを得ることができたのである。昨今我々の食膳に上がる養殖鰻は稚魚を養殖したものであり、鮭のように受精卵から出発したものではない。現在でも日本鰻の産卵場所は明らかになって

いない。これはアリストテレスの観察の鋭さを示す一つの証左であろう。

第二の命題は今日宗教の問題であるとされる。宗教や芸術の分野は主観的なものであり、従って積み重ねによる進歩は期待できない。一人一人の感受性と体験を通じて納得して行く外に道はないのである。

自然科学の分野では現在の我々凡百の者の方が二百年前の天才よりも多くの事を知っているであろう。一方宗教や芸術の世界では我々が出す答よりも二千年前の賢者が出した答の方が上質のものであると考えるのが妥当であろう。(生物学)

<参考図書>

『アリストテレス全集』 山本光雄編
出 隆 監修 岩波書店 1968-1972
(131.4/A76/1-17)

閲覧証の交付

教養図書館を利用するには、閲覧証が必要です。新入生の皆さんには、下記の日程で交付します。当日カウンターまで取りに来て下さい。ただし、医学部は医学図書館で4月25日(水)以降交付します。

この閲覧証は、卒業するまで有効です。大切にして下さい。なお、交付までの間は、学生証を使用して下さい。

衛生学部	4月23日(月)
薬学部	4月24日(火)
獣医畜産学部	4月25日(水)
水産学部	4月26日(木)
看護学部	4月27日(金)

閲覧ニュース 60号

1990.4発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 手塚 甫

電話 (0427) 78-8005